

## 総 括

### 長 友 和 彦

この分科会は、(1)日本における日本研究との比較という視点を持つつつ、アジアにおける日本研究の実状に少しでも触れることと、(2)アジアにおける日本研究の促進に寄与できる共同研究体制のあり方をお茶大として模索することを主たる目的として企画された。その目的の具現化の過程においては、お茶大がいわゆる大学間学術・学生交流協定を結んでいる大学との情報交換や共同研究がその中核になっていくだろうと考え、私どもの限られた人脈と予算上の制約の中で、韓国・淑明女子大学の金善民氏と台湾・国立台湾大学の何瑞簾氏をお招きし、それぞれの国の日本研究について自由な視点でお話しいただいた。それに、この分科会の創出者でもあるお茶大の小風氏が加わり、日本における日本研究の課題を提起する形で分科会を進め、最後にこの三氏の発表についての質疑応答・討論で会を締めくくった。三氏に発表の内容は本報告書にある通りである。

ご専門の歴史学研究の中で培われたに違いない冷徹な目で韓国の日本研究の歴史と現状を見つめながら、学際的な日本研究の発展に希望を託すとされた金善民氏、また、浮き彫りにされる台湾の日本研究と日本語教育の歴史と現状が、実は氏の激動の人生そのものであったことが見えてくる何瑞簾氏、それぞれが語られた内容は、想像力を喚起させ、多くのことを学ばせてくれる新鮮なものであり、同時に長い歴史を共有してきた国と人の言葉として、心に深く食い込むものであったと思う。韓国の日本研究は韓国の歴史であり、台湾の日本研究は台湾の歴史であるという自明なことと、日本で日本研究に携わる私どもがその歴史に対して無知であり、無関心であつたことを再認識させられる内容でもあった。と同時に、注意深く語られた日本研究の今後の課題と展望には、自国の次世代への期待と希望が託されていたとも思う。その期待と希望を、お茶大を含む日本の日本研究が取り組むべき具体的な課題としてとらえ直し、積極的にそれを担おうとしているのが小風氏であった。隣国、アジア諸国、そして世界における日本研究との交流が恒常的に可能になる研究体制と情報ネットワークを確立し、日本研究の視点と内容を多元化できるかどうかは、まずはお茶大に集う私どもの主体的な努力にかかっていると言えよう。